

ゼロ魔！

紺南

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ルイズの兄に転生したやつが色々やってる話。

目次

第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
45	39	31	24	19	13	6	1

## 第1話

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

トリステイン魔法学院に通う一学生である。

ヴァリエール公爵家の三女として生を受けた彼女は、幼い頃より名門貴族の名に違わぬ才能を発揮し、学園にその名を轟かせていた。

先日、使い魔召喚の儀式で英知の象徴と言われる梟を呼び出し、それにミネルヴァと言う名を付けた。

最初は「フクロウか……」と複雑な気持ちを抱いた彼女だが、一日もともに過ごせばミネルヴァこそ私に相応しい立派な使い魔であると言う自負を確固たるものにした。

すなわち、彼女は案外可愛いものが好きだったのだ。

そんな風に学園生活を満喫していた彼女だが、ある日自らの元へ手紙が届いた。

ヴァリエール家の封がなされたそれをルイズは神妙な表情で受け取った。

授業終わりにわざわざ学院長が届けてくれたこともあって、学友たちは興味津々にルイズを見ている。

ほとんどが遠巻きに憶測をぶちまけるだけだったが、その内の一人、キュルケがからかうようにルイズに声をかけた。

「ルイズなによそれ。愛しい人からの恋文？」

「実家からのファンレターよ」

「あなたにもファンなんていたのねえ……。まあでも私ほどじゃないでしょう？」

髪を掻き上げ、うなじをさらけ出す。

それだけで周囲の男子たちの視線は彼女の蠱惑的な身体に釘つけになった。

ルイズは目つき悪くそれを見て、自分の身体を見下ろす。

ストーンと崖下まで見下ろすことの出来る平野。

身長はない。胸もない。あるのは才能だけ。

それで十分。十分よルイズ。

ルイズは己に重々言い聞かせて自分の席に戻る。

背後から聞こえる「あらー？ 嫉妬しちゃったー？」という声はきつとまやかした。

そうでなければサキュバスの挑発に他ならない。

なんとということか。ツエルプストーは悪魔を飼っているのだ。

いや、ツエルプストーこそが悪魔なのだ。

悪魔は滅ぼさねばならない。

信仰心厚きヴァリエールは、悪魔にのつとられしツエルプストーを救う義務がある。

救わねばならない。それこそが偉大なるブリミルさまの教えなのだ。

ルイズは机の上の教材を鞆にしまい、杖を握りしめた。

他人に見られぬよう、万が一見られても大丈夫なよう無言で神速が如き速度で杖を振るった。

とたん、キュルケを中心に強風が吹きすさび、足元で発生した上昇気流により彼女のスカートはめくれ上がった。

「……」

事態を認識するまでの数秒。

男子の目は肉食獣が如く、目の前の光景を目に焼き付け、事態に気が付いたキュルケがようやくスカートを抑える。

羞恥心に頬を真っ赤に染め、震えながらおそらく下手人と見られる少女へ低く低く問いかけた。

「……ルイズ？」

「あら、サービス精神旺盛なキュルケさん。どうかいたしましたかしら？」

「これやったのあなたでしょう」

「いやだわ。一体何のことでしょう。私、身に覚えがないですわ」

「あんたのそのふざけた口調が全て語ってくれてるのよ！」

キュルケは杖を取り出した。

ルイズも杖を握りしめる。

お互いに魔力を高め合い、さあ開戦という刹那。

またもや教室に強風が吹いた。

あまりの強風に吹き飛ばされる者まで出る始末。

「マリコルヌー!!」叫びを背後に、二人の杖は風にあおられ吹き飛んだ。

風はあらゆる方向に飛ばされ、教室をぐるっと一周したかと思うと窓際に座っていた少女の足元に転がる。

少女は本を片手に杖を拾った。

「タバサっ！ あなた——」

「教室で魔法戦はダメ」

静かに説かれる。

ルイズとキュルケは顔を見合わせ、やがてどちらともなく「ふんつ」と顔を逸らした。

ルイズはそのまま大股にタバサに近づく。

「杖を返してもらえる？」

「魔法は……」

「使わない。約束するから、返して」

タバサは杖を手渡した。

ルイズは踵を返し、カバンを引っ掴んで足早に教室を後にする。

去り際「一つご忠告。過剰なサービスはファンにもあなたにも毒よ」と言い捨てていくのは忘れない。

唇を引き結んだキュルケに、ルイズは勝者の余裕を見せて教室を後にした。

背後で響く負け犬の遠吠えに、ルイズの口角はにんまりと上がった。

自室に戻り、鞆はベッドの上に放り投げた。  
ばんつと重い音なる。

その音に驚いて、窓際の止まり木で微睡んでいた梟が「ほー」と抗議に鳴いた。

静かな声だ。

ルイズは勝利に沸き立つ心が静まっていくのを感じた。

「ごめんねミネルヴァ」と一言謝る。

「ほー」と言う応えは「許す」と言っているような気がして、ルイズは口元をほころばせた。

さて、勝者の余裕を取り戻したところで事の本題である手紙だ。

実家から届いたそれには家紋が封蝋で施されている。

ルイズは自分の心臓がバクバクと早鐘を打ち始めたのを感じる。中にどんなことが書いているのか。

今まで半ば放任主義だった父母が今こうして手紙を送る理由とは何なのか。

ルイズはてんで想像できなかった。

何……？ なんなのこれ……？ 何が書いてあるの……？

オールドオスマンに手渡された時から、内心そんな感じに狼狽していた。

先ほどの教室での短気は、余裕がないからこそ引き起こされた悲劇である。

しかし憎きツエルプストーに痛打を食らわせることができたのだから、不幸中の幸いというところだ。

震える手で手紙を開封する。

見るところ、便箋は一枚だけの様だ。

カサカサと紙の擦れ合う音が顕著に耳に響く。

しかしいつまでも臆してはいられない。

いざ意を決して手紙を開いた。

そこに書かれている文字を読むにつれ、不安に震えていた瞳は平坦に、かつ物騒な色に染まっていく。

無意識に紙を掴む手に力が籠ってしまった。

ぐしやつと深い皺が刻まれる。

「ふっ、ふっ……。ふっふっふっ……」

ついに、ルイズは怒りのままに手紙を引き裂いた。

その表情は赤く染まり、眼は吊り上がって、犬歯がキラリと光を反射する。

紛うことなき殺気を身に纏い、ルイズは喉の許す限りあらん限りの力で叫んだ。

「あんのばかあああああああああつ!!!!」

窓を揺らし、遠く離れた食器すら微振動させたという大咆哮は、その後結構な期間語り継がれたという。



## 第2話

馬車に乗るのは初めてだ。

少年は御者が馬を操るのを眺めてそう思った。ゆつくりと過ぎ去るのどかな風景は、少年にとってあまり馴染みのあるものではない。

小鳥が囀り、蝶が舞う。燦々と輝く太陽。

吹く風ですらどこか新鮮に感じる。

広い馬車に、少年の他に客はいない。

それもそのはず。この馬車は少年のためだけに用意された物だった。

広い馬車は後3人は優に座れるだろう。

貸し切りだ。

最初こそ、この待遇にテンションが上がったものだったが、いくら進んでも変わらない平和な風景に退屈している。

今となつては、誰か話しても出来る人が欲しかったなあと欠伸をこぼしながら思った。

トリステインに入つて早二日。

聞いた話では目的地には三日あれば着くということだ。

あと一日。やることがないというのがこれほど苦痛だとは知らなかった。

うーんつと大きく身体を伸ばす。

小石を踏むたびにガタガタ揺れる馬車。

尻の痛みは昨日一日で限界を突破した。

「あー」

その場に寝てみる。

揺れは全身を苛んできた。

苛烈だ。

もうだめだ。死んでしまえそう。

少年がそう思った時、不意に馬車が止まった。

慣性で少年は座席から落ちる。

うつ伏せに落ちた少年。

いつてえ、と鼻を擦っていると、御者の声が聞こえてきた。

「ダメだ」

「近くの町まででいいんです。お金なら払います」

「無理だ。他を当たってくれ」

誰かと話しているようだった。

こんなところで誰と。

そつと窓から覗いてみる。

同じ年ぐらいの黒髪の女の子がいた。

どうやら乗せてくれと言っているらしい。

金なら払うから乗せてくれないかと。

どうして御者が無下になっているのか分からない。

席なら空いてるし、乗せてやればいいじゃないかと。

しばらく覗いていると、ついに少女は諦めたらしく暗い表情できびすを返した。

少年はその顔を見て居ても立つても居られなくなつて馬車を飛び出した。

「おいおっちゃんー！」

その声にぎよつとした顔の御者。

少し離れた所で少女が振り向いた。

「乗せてやればいいじゃねえかよ。なんでそんな意地悪するんだ」

「い、いや、意地悪してるってわけじゃ……」

「なんか乗せられない理由でもあんのか？」

「は、いや理由と言いますか……その……」

曖昧な言葉に、少年の憤りは膨れ上がった。

「じゃあ乗せてやつてもいいじゃねえか」

「……いいんですか？」

恐る恐る、御者は聞いてくる。

その態度の意味が分からないまま、少年は断言した。

「別にいいだろ」

「……それじゃあ」

離れた場所で少年たちを伺っていた少女を呼んだ。

「乗ってもいいってよ」

「いいんですか?」

「ああ、ただし代金はきっちり貰うよ」

少女は御者に代金を払い、馬車に乗り込む。

一足先に乗っていた少年の向かいに座った。

「よいしょ」と重そうな荷物を隣の席に下ろす。

そうして、花開くような笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。助かりました」

「いや、そんな」

女慣れしていない少年。

こんな笑顔を向けられただけで、鼻の下を伸ばしてデレッツデレだ。

「俺も退屈してたからさ。話し相手が出来て嬉しいよ」

よく見ればとても可愛い女の子だった。

別に女の子だから助けたわけではないのだが、しかしなんだろう。

得した気分だ。

「私で良ければ喜んでお相手します」

それから思い出したように、

「私シエスタって言います。……あなたのお名前は?」

その言葉で我に返った少年はシエスタの胸に向けていた視線を戻した。

「ああ」

と慌てながら一つ咳払い。

誤魔化せただろうか。シエスタの表情を見る限り気づかれてはいなさそうだ。

「おれ、平賀才人。こっちだとサイト・ヒラガになるのかな」

よろしくと人懐っこい笑みを浮かべるサイト。

シエスタは驚きのまま、数度瞬きをした。

「いや、貴族じゃないよおれ」

その言葉に、シエスタはほつと息を吐いた。

もしサイトが貴族だとしたら、馬車を止め、どころか乗り込んでき  
たシエスタは首を刎ねられていてもおかしくはなかった。

「こつちだと名字があるのは珍しいんだってな」

カラカラと笑うサイト。

「こつち？」とシエスタは疑問に思ったが、その前にサイトが尋ねてき  
た。

「それよりも、シエスタはどうしてあんなところにいたんだ？ そん  
な重そうな荷物までもって」

「ああ、いえ。何と言いますか……」

言いにくそうに、シエスタは口ごもる。

「馬車には乗ってたんです。ただ、一緒に乗ってた人に……その、触ら  
れそうになって……。我慢できずに飛び出しちゃいました」

お金片道分無駄になっちゃいましたとシエスタは茶化すように  
笑った。

サイトは相乗りしていた何某に怒りを覚え、シエスタのたゆんたゆ  
んに揺れる胸を見て無理もないなあと共感し、はつと我に返って怒り  
に燃えた。

そこには自分への怒りも多分に含まれていた。

腕を組み「けしからんけしからん」と繰り返すサイト。

もちろん、シエスタはサイトの視線には気づいている。

「それで、この馬車はどちらまで行かれるんでしょうか。途中、町があ  
るならそこで降りようと思うんですけど」

「えつと……。どつって言ったかなあ」

うーんと真剣に悩みだしたサイトに、シエスタは若干の危機感を覚えた。

まさかどこに行くかも分からない馬車に乗っていたのか。変人じゃないか。

しかしそれはすぐに雲散する。

「トリ……とりすた……トリステイン！」

「えっ」

「トリステイン魔法学院！ ……って名前だったはず」

言う口は自身なさげで、語尾に至るまでに声音は小さくなった。しかしシエスタは聞き逃すことはなかった。

トリステイン魔法学院。

くしくも、シエスタの目的地であり勤務場所でもある学院だった。

「学院に何か用事でも？ どなたかに言伝とか」

「いや、とくにそう言うものはないけど」

「じゃあどうして？」

「行けって言われたから」

誰に？

シエスタはこれ以上踏み込むべきか迷った。

あそこはトリステイン王国の貴族が通う魔法学院だ。

自称平民のサイトが行っても門前払いになる可能性が強い。

それどころか捕まって投獄されるなんてこともありうる。

うーんとシエスタは悩んだ。

その間、サイトは澄んだ瞳でシエスタを見ていた。

まっすぐにシエスタを貫いた。純粹無垢な瞳がそこにあった。

ああ、ダメだ。

曲がりなりにも恩があるこの人を見捨てることはできない。

「奇遇ですねっ、私じつは魔法学院で働いているんです」

「え、そうなの？」

「はい。メイドとして、ですけど」

へーと感嘆詞。

感嘆の理由は奇妙な偶然が4に、メイドと言う単語に6だ。

メイド、秋葉原、メイド喫茶……。くうくつ！

対して、そんなことは知る由のないシエスタは営業スマイルを深めた。

「ところでサイトさんは魔法学院がどういう場所かご存知ですか？」

「いや、ぜんぜん知らない」

でしようねと本音は隠す。

「学院には貴族様のご子息、ご息女様が通われています。なので入れてくれと言って入れてくれる場所ではないです。サイトさんは何かそういう身分を証明できるものはお持ちですか？」

貴族であれば何の問題もないのだ。

見るところサイトは変わった格好をしているが、貴族の好む金色の貴金属とか、綺麗な宝石は身に着けていない。

精々左手の高そうな手袋ぐらいだ。

しばし、うーんと悩んだサイトは、ピンツ！ と思いついてポケットをまさぐった。

「これはどうかな」

それは一通の手紙だった。

きちんと蠟で封がしてある。

その蠟にどこかの家の紋が押しあつたが、シエスタにそれがどこかの家の紋なのかは分からなかった。

「これはどうしたんですか？」

「出る時に渡された。これ見せれば大丈夫だって」

今度はシエスタがうーんと唸る。

高価な紙。蠟で封がしてあり、そこには家紋がある。

サイトに学院に向かうよう言ったのはまず間違いなくどこかの貴族だろうが、それにしてもサイトは何も知らされていない。

心配になるぐらい何も知らない。これはもう絶対にわざとだ。

平民を使つて、用件を何も知らさず、貴族が裏に居る。

想像力逞しく、嫌な想像がいくつもいくつも浮かんで消えていった。

「……なんか顔青いけど？」

「いえ、なんでもないです」

「大丈夫か？」

大丈夫、大丈夫です。

本心は全然大丈夫じゃないです。

やばいです。これやばいです。絶対やばいやつです。

思えば御者の態度からして普通じゃなかった。

貴族だからと思えばそうじゃない。でも裏には貴族がいる。

特別な任務を任されてるんだ。しかも密命。

本人も知らされてないぐらいの凄いやつ。

とんでもないこととしてしまったかもしれない。

密命の途中に割り込んできた異分子。

始末される……!?!

「あの、用事を思い出したので、途中の町で降ろしてもらえますか」

「え、もう町よらないけど」

「は……」

まっすぐ一直線に魔法学院まで。

いくつか町はあるのに、全部すっ飛ばして。

御者も眠らずに一晩馬を繰る。

こ、これはダメだ……!!

トカゲのしつぽにされる。

余計なことに関わってしまったがために、私もろとも。

ああああああああああああああああああ

頭を抱えるシエスタを、サイトは不思議そけに!!!!!!見えていた。

### 第3話

翌日、眠れぬ一夜を過ごしたシエスタは、目の下の隈に殺気あふるる眼力を伴にして凄まじい威圧感をサイトへ与えていた。

その眼からは恨めしやと怨念が零れている。

サイトはシエスタの怖すぎる視線に慄きながら、決してシエスタを見ないよう細心の注意を払った。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫ですよサイトさん……。ふふふ、大丈夫でした」

大丈夫じゃない。俺何かしました？

ひよつとして旅疲れだろうか。帰ったらゆっくりしてほしい。

「まあ、ゆ……。ゆつくり休めよ……」

「ありがとうございます」

などと話している所で、馬車はガタンツと段差を乗り越えて揺れる。

ん？ と思つて外を見ると、目的地は既に目前に迫っていた。

「おおおっ!!」

思わず、サイトは声を上げていた。

目の前の大きな塔。その周りに小ぶり塔がいくつか立ち、全てを囲むようにして外壁がそそり立っている。

欧州のなんかの世界遺産みたいだ。

その感想がサイト精一杯の褒め言葉だった。

「すげえ……」

馬車から降りた二人。

あまりの大きさに、首が痛くなるほど見上げなければならない。

圧倒されるサイトをシエスタは微笑みで見守る。

「これ全部学校かよ。すげえ日本と大違いだ……」

サイトの呟きはシエスタに聞こえていた。

当然、日本というのがなんなのか、シエスタは分からない。

聞きたいという気持ちはあったが、これ以上の深入りは本当に命取りになりそうだ。



「それじゃあサイトさん。学院長のところまでご案内しますので――」

その時、ようやくシエスタは気づいた。

目の端で、とんでもない威圧感を放つそれに。

「……………」

鬼が居た。

ゴゴゴゴゴツ!!!

そんな効果音が聞こえてくるようだ。

目は獲物を狙うように爛々と輝き、シエスタを射抜いていた。

「ひっ…………」

ついこぼれた悲鳴を手で抑える。

シエスタはその鬼を知っていた。

小さな体躯に、目つきだけは鬼の様。

桃色がかったブロンドはまさしく高貴の証。

泣く子も黙るヴァリエール家の三女ルイズ・フランソワーズ・ル・

ブラン・ド・ラ・ヴァリエールとは彼女のことだった。

ルイズはたった今到着した二人を殺さんばかりの目で見ていた。

何か言いたいことがあるのか、眼だけは如実に殺意を抱いている。

さすがに、これだけガン見されては無視するわけにはいかない。

正直無視したいのは山々だが、仮に無視して因縁つけられたらなす

すべがない。

今こうしている間もルイズの瞳は寸分狂わずシエスタを捉えてい

るのだ。

シエスタは意を決してルイズに話しかけた。

「ミ、ミス・ヴァリエール…………？　　どうかなさいましたでしょうか…………

？」

「はっ？」

不機嫌そうな声。

ああ、やっぱりやめとけばよかった。

そう思っても後悔すでに遅し。

ルイズはシエスタを上から下までじろじろと吟味した。

「あんたどっかで見たことあるわね」

「この学院でメイドをしております。シエスタと申します」

ああ、そういえば。

記憶の隅でこの顔を見た気がする。

メイド服を着せてみれば、そっくりそのまま合致するだろう。

「で」

「はい」

「そこの男は？」

「……」

当然、ルイズの追及はサイトまで及ぶ。

どう答えたものかとシエスタは一瞬沈黙した。

そのわずかな間で、ルイズの目つきは一層深刻になった。

慌ててシエスタは言った。

「この学院に通うどなたかにご用事があるそうです」

「用事？」

まさか……。

ルイズの胸中に一抹の疑念が湧いた。

こいつ……？

「……」

ルイズは半ば睨むようにサイトを見た。

あまりの緊張感に、サイトは唾を飲み込まずにはいられなかった。

「あなた名前は？」

「え」

「な・ま・えは？」

「ひ、平賀才人。サイト・ヒラガ」

変な名前。

でも名字持ち。

もしかして貴族か。

しかしサイトの服装はそうであるとは言っていない。

明らかに平民の服装で、立ち振る舞いからも高貴さは一欠けらも感じない。

田舎もんだ。

「……学院に何の用？ 平民が立ち入ることは許されないわよ」

サイトはシエスタを横目で見た。

シエスタもサイトを見る。数瞬二人は見つめあった。

どちらともなく目を離れた後、サイトがポケットを探る。

「これ」

取り出したのは昨日シエスタに見せた手紙である。

これ見せれば大丈夫と言う彼の言葉を信じて、サイトはルイズに手渡した。

受け取ったそれをルイズはじろじろと見た。

裏返し差出人の名前が書かれていないことを確認する。

次に封蝋を見たとき、その表情は決定的に凍り付いた。

「……………」

しばしの沈黙。

サイトとシエスタは固唾をのんで見守った。

ルイズは封蝋を凝視している。

手紙を握る手はこれ以上ないほど力が籠っていた。

やがて、手紙から目を離れたルイズはうつろな目でサイトを見た。

「……………ふっ」

諦めたような小笑い。

突如哀愁背負ったルイズに、二人は困惑した。

「……サイトって言ったわね」

「ああ」

「私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

「え？ る？」

一息にそんなことを言われたから、サイトは困惑した。

長っ……………どこが名前？

ルイズは事務的にもう一度繰り返す。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

「えっと、ルイズでいいのか？」

「……まあいいわ」

ついてきなさい。そう言つて、ルイズは学院へ踵を返す。

サイトは慌ててその背に追従した。

「いや、ついてきなさいって、俺これから学院長のところ行かなきゃいけないんだけど」

「だから、学院長のところ行くのよ」

ん？

サイトは今一ルイズが何を言っているのか分からなかった。

どうしてルイズが案内してくれるんだろう。

そのサイトの反応に、ルイズは怪訝そうに振り返る。

「あんた、これの身身知らないの？」

「いや俺字読めないからさ」

平民なら珍しいことではない。

物を買うための必要最低限の読み書きしか出来ないという平民がほとんどだ。

しかもサイトはその最低限すらできなかつたりする。

決して褒められることではないが、責めることもない。

「何も聞かされてないのね？」

サイトは頷いた。

ルイズは頭を抱えて転げまわりたくなつた。

うっそ……。

「あなた、どうしてここにいるかおわかり？」

「この手紙を持って行けつて……」

段々とルイズの表情はやわらかく優しくなっている。

反して、殺気と威圧感が増すばかり。

口調なんかはもうドスが効いている。

鬼の再来である。

「ああ……っ？」

「ごめんなさい！ 何にも知らなくてごめんなさい！ よろしければ教えていただけませんか!？」

ルイズは髪を掻き上げて自分を落ち着かせた。

ゆっくりと一呼吸。

こいつは平民。私はヴァリエール家の三女。

ここで怒るのは大人げないわ。そうでしょうルイズ？

「いいわ。サイト・ヒラガ。教えてあげましょう」

腕を組んでの凜とした物言いに、サイトは思わず平伏しそうになった。

助かった……。

本気で殺されるかと思った。

貴族ってこんなに怖い……。

その一方でルイズは頬を痙攣させ、心の底から上り来る拒絶感に抗っていた。

どうして私がこんなことを……。

これも全てあいつが悪い。

人が悪い。ほんつとうに人が悪い。

絶対に目に物見せてやる。

そうやって、なるべくカタルシス解放の時を誓って、内心臍を噛みながら続けた。

「あなたはこれからここで暮らすの」

「は？」

サイトにしても寝耳に水。

そんな話はまったくこれっぽっちも聞いていない。

「言ったでしょう。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・

ヴァリエール」

ルイズはサイトの目を真っ直ぐ見つめる。

呆けている。本当にまったく聞かされていなかったのか。

一体どういうつもりだ、あいつ。

手っ取り早く、ルイズはド直球をかますことにした。

「あなたをここに来させたエリイ・フェリクス・ル・ブラン・ド・ラ・

ヴァリエールは私の兄よ」

## 第4話

ルイズは寒々しい石の廊下を歩いて行く。

カツンカツンと足音が響く廊下は、ひと気のなさど合わさって余計に寒々しく感じる。

これからのことを思うルイズの内心を現しているようでもあった。すぐ後ろには、サイトと何故かシエスタがついてきている。

ルイズはシエスタの存在を怪訝に思いながら、特に何か言うことはなかった。

それよりもまず先にオールドオスマンの元へ。

他のことは後でゆっくり問い詰めればいい。

その考えからルイズは二人の存在を半ば無視して早足に動かす。

そのうしろで、ちよつとした衝撃の事実を聞かされたサイトは、「まさか貴族だったとは……」と抜けきらないショックにふらふらと足取りがおぼつかない。

貴族は怖い。貴族はやばい。

シエスタの言葉と、実際にルイズの怖さを目の当たりにして、今までの自身の態度を鑑みたとき、あまりに不敬な言動が多かった。

言い争いはもちろん、なんなら殴り合いにまで発展したこともある。

まさか、まさか……。

理性は否定している。しかし本能の一部はやつべえと冷や汗をかいている。

万に一つないとは分かっているながら、もしかしたらの可能性は捨てきれない。

次に会った時「お前、処刑」と無慈悲に宣告されるのではと。

うおおおつ!! 信じてるからなエリイ!!

遠くへいるだろうエリイへとそんな咆哮をあげる。

むろんのこと、届くはずはない。

むなししい遠吠えである。

そんな二人の内心を、一步控えたところからシエスタは面白おかし

く眺めていた。

昨日から抱かされていた危機感はあるつきり杞憂であった。散々心配させられたのだから、少しぐらい見返りを求めてもいいのではないか。

シエスタがここにいる理由はそんな気持ちからだ。

「着いたわ」

一つの扉を前にして、ルイズは足を止めた。

小さく深呼吸をする。

それから力強く戸を叩いてから入室する。

「失礼します」

「む……。おお、ミス・ヴァリエール。これはこれは一体何の用事で……」

ルイズに続くサイトの姿を見て言葉を途切れさせたのは、白い立派な鬚を携えた古老。

学院長のオールド・オスマンである。

そこから少し離れた本棚の前には、両手に書物を持った女性。眼鏡のよく似合う秘書、ミス・ロングビルが居た。

彼女は当初はオスマンに絶対零度が如き視線を送っていたが、突然入ってきたルイズたちに目を白黒させた。

「ふむ……。そこの彼が先日の話の人物かね？」

「どうもそのようですわ」

苦虫をかみつぶしたような表情で、ルイズは首肯する。

オスマンはサイトを下から上まで眺めて、なるほどなるほどと頷いた。

「ミス・ヴァリエールたっての望みとあらば、叶えてやらんこともないと思っていたが……まさか平民とはのう」

「……申し訳ありません」

「いや、君が謝ることではない」

しかし……。

とオスマンはもう一度サイトを見た。

そこには一片の悪感情もなく、どこか労わる様なものが感じられ

た。

しかし次の瞬間には断固となる意思を孕ませて、オスマンはルイズに視線を戻す。

「ミス・ヴァリエール。君にこの様な話は無用であるとは重々承知だが、今一度確認の意味もかねて話しておきたい」

その前置きを挟んでオスマンは滔々と話しだした。

「知つての通り、ここはトリステイン魔法学院。魔法を学び、研究する。そのための卵を育成する学校じゃ」

ルイズは頷く。

「魔法を扱える者だけが入学を許されると言う建前の元、古からの習慣に従って、貴族にしか入学は許されておらぬ」

苦々しい表情のルイズの横で「え？」とサイトが呟いた。

オスマンは横目にサイトを見て、すぐにルイズに視線を戻した。

「むろん、貴族しか魔法が使えないというわけではない。没落した家々、あるいは貴族が無責任に孕ませた子供。時代を経て、平民の中にも魔法が扱える者は増えておる」

「しかし」と重々しい声音。

ルイズには、サイトすらも、もはやその先を聞く必要はなかった。

ルイズはオスマンの話を遮って身を乗り出す。

「私は何も彼を入学させるつもりはないんです。ただ、少しの間学院に置いておければと……」

しかしオスマンは厳かに首を振った。

「この学院に通う子らは皆貴族。そこに平民の子を客として招くということは争いの種じゃ。これは彼のためでもある」

貴族の中に平民一人放りだせば、方々からの嫉妬ややつかみを受け、酷いいじめにあうことは眼に見えている。

もしそれに抵抗したり反撃すれば最悪殺されてしまうかもしれない。

オスマンもルイズも、もしそうなってしまえばいくら教師の権力や家の力を用いても守ってやることはできないだろう。

なにせサイトは平民なのだ。



「もし、それでもなお、そうせねばならぬ事情があるというのであれば、僕も考えたじやろうが、この子をここに寄こした本人は居らんようじやの」

初めて、オスマンはサイトとルイズの後ろに控えているシエスタを見た。

見られたシエスタは視線をあらぬ方向に向けたまま、すすすつとサイトの影に移動し空気と化した。

オスマンは眼を伏して自身の骨ばった手を見ながら、なおもはつきりとした口調で断言した。

「残念じゃが、彼を学院に受け入れることは出来ん」

それからしばしの沈黙が流れた。

ルイズは顔を伏せたまま何も言わない。

サイトはその空気にあてられて口を開くことができなかった。

あと、ぴつたりと貼り付いてくるシエスタの胸に気を削がれていたというのもある。

刹那の沈黙の後、溜息のように大きく息を吐いたルイズは、顔を附せたまま暗い調子で口を開いた。

「……わかりましたわ。オールド・オスマン」

「すまんのう」

それから一拍間をあけて、

「僕が言うのもなんじやが、君の実家に預けるという手もあるじやろう。……ミスタ・ヴァリエールと御父母殿に多少わだかまりはあるのかもしれないが」

「そうですね。それが最善かと思えます。無理なお願いをして申し訳ありませんでした」

踵を返したルイズはサイトの手を取って「行くわよ」と促した。

サイトは成すがまま引き摺られるようにして歩き出す。

傍観していたミス・ロングビルの横を抜けて扉を開く。

吹き付ける風に構わず、ルイズはずんずんと敷居をまたいだ。

その背に向けてロングビルが何かを言いかけたとき、

「だったら使用人として働いていただくというのはどうでしょう?」

一瞬早くそれを言ったのは、t h e・空気あらためシエスタだった。

## 第5話

「……使用人として？」

敷居をまたいで振り返ったルイズがおうむ返しに繰り返した。

不機嫌さを露わに、シエスタを睨みつけるように見る。

「あんた本気で言ってるの？」

「はい」

何を悪びれるでもなく、あつけらかなとシエスタは頷く。

「学院長がサイトさんを受け入れられないのは、早い話火種を持ちこみたくないからでしょう？」

平民で、どこの誰とも分からないサイトを客として受け入れる。

平民と貴族を一緒くたに纏めるのはどう考えても無理がある。

それが無理なら、無理な箇所を可能になる様に変更してやればいい。

この場合、平民であることはどうあがいても変えようがない。

変えるなら客の部分だ。

「だからお客様としてではなく、私たちと同じ使用人としてなら、最初から上下の関係がはつきりしていますし、争いが起こることもないではないでしょうか？」

「ふむ……」

オスマンは顎鬚を擦った。

一考の価値ありと見なしたようだった。

しかし実際にどうしたいか、決めるのは自分ではないとルイズを見れば、当の彼女は眉を顰めて考え込んでいる。

「ミス・ヴァリエール。私は拝見していませんが、サイトさんの手紙には使用人としてではなく、きちんと客として扱うようにと書かれているのですか？」

「……書かれてないわ」

ルイズに届いた手紙には「しばらく学院で人を預かってほしい。よろしく」としか書かれていなかった。

それ以外の情報は全くなく、久方ぶりの安否を知らせる手紙がこれ

かとルイズは激高した。

加えてまさか平民の男の子が来るとは思っていなかったルイズは、サイトがそうだと知ったとき、にわかには信じられなかった。

手紙には客として扱えとは書かれていない。

だから使用人として扱ってしまえ、と。

客として扱うのが無理だと分かった今、妙案に思える。

だが果たしてそれでいいのかという不安と不満がルイズの胸中を渦巻いていた。

ルイズの家族へ良い顔をした感情が表に出ていた。

音信不通の兄であってもそうである。

10の要望を12で返す。

恩を売れる分、次に何かあった時いうことを聞かせやすい。

特に今回はあのエリーの頼みなのだ。

いつか再会した時のために、恩は出来る限り売っておきたかった。

いうことを聞かせるための材料を用意しておきたかった。

実家に戻らせるための材料を。

しかし事ここに至って、未だそれを望むのはあまりに業突く張りというものだ。

ルイズは三度敷居をまたぎ、オスマンの眼前へと歩み寄った。

「……オールド・オスマン」

「うむ」

オスマンはゆったりと顎鬚をさすっている。

何が言いたいかはわかっていると口元にほのかな微笑みすら浮かんでいた。

その動作がいやにルイズの神経を逆なでした。

「サイト・ヒラガを学園で雇っていたかどうかは可能でしょうか？」

その晩、サイトは学園にある小さな部屋で一人横になっていた。シエスタに連れられて来たその部屋は使用人用の個室であった。サイトは今ぼうつと天井を見つめて考え事をしている。

彼を照らす唯一の光は隙間風に揺らされて儂げに揺らめいた。垂れた蠟が燭台に固まって白くこびりついている。

黒い煤で汚れきった燭台に蠟が対照的に際立っていた。

サイトは視線を動かした。

小さな部屋に、ベッドと机と椅子と箆笥。

それで一杯一杯の広さだ。

ただ一つの窓の向こう。

窓の外を覆う帳には細かな星々が装飾されている。

その星々の位置はサイトが知っている座標ではない。

何より月が二つある。

赤と緑の月々はサイトの知るそれよりはるかに大きく、ずっと明るい。  
い。

赤と緑の月々に照らされる風景は今まで見たことがないほど幻想的だった。

ここが日本ではないことを何よりも如実に証明している。

「母さん……」

不意に出た言葉に意味はない。

この世界にいないその人を呼んだ理由を、サイトはよく分かっていた。  
た。

「明日から執事だつてき。何すればいいのかはシエスタが教えてくれ

るって」

そこから先は言葉に詰まったように途切れた。

何も知らされずここまで来た。

何も言われずこの世界にやってきた。

エリイは今どこで何をしているのだろうか。

サイトは思い出す。

必ず元の世界に戻すと言っていた。

そのために世界を旅すると。

必ず帰る方法があるはずだと。

何かあてがあるらしかった。

サイトはエリイに着いて行くつもりだった。

待てと言っていた。お前はここで待てと。

けれどサイトは頑として首を縦に振らなかった。

危険だからと、無関係を装って待つことなど出来ようはずはなかった。

不用意に宙に浮かぶ鏡に手を突っ込んだ俺にも責任はあるとまで考えていた。

俺のことなんだから俺も行くと言張して、その言葉を最後まで貫き通した。

渋々、エリイも納得したはずだった。

それなのに……。

「なにやってんだよ……」

あいつは今どこにいるんだろう。

空に浮かぶ大陸を出てこの国に着いたとき、エリイは一度実家に戻ると言っていた。

何も言わずに出てきた。

間違いなく修羅場になるからお前は先に行っていると言いとサイトを一人馬車に乗せた。

トリステイン魔法学院の知り合いに話は通してある。その手紙を持って行けと。

結果、この現状である。

最初からエリイはサイトを連れていくつもりはなかった。  
最初からサイトをここに残して行く算段だった。

「くそっ！」

反芻した事実には苛立ちが募って、サイトは起き上がった。

無造作に置かれていたエリイの手紙を掴み、力の限り床にたたきつけた。

「なんなんだよ、一体!!」

苛立ちには治まらない。

騙された。裏切られた。

抑えきれない悲しみはサイトの胸中を蝕んだ。

今、サイトは一人である。

その個室にサイト以外誰も居ない。

この世界に来て初めて孤独が襲ってきた。

サイトに親身になってくれた人は誰も居ない。

母も父も友人も。

エリイもあの子も。

誰も居ない。

サイトは布団にくるまって目を閉じた。

瞼の奥の暗闇はサイトを慰めるようににじり寄ってきて、その実、  
言い知れない悲しみが心を満たした。

「サイトきーん、起きてください」  
ふわふわと浮かぶ意識はゆらゆらと心に安らぎを満たしている。

昨日、あれだけ恐怖した暗闇が揺り籠のようにサイトを優しく包み込んでいた。

自身を呼ぶ声は夜の幕の向こうから聞こえてくるようだった。

「サイトさん。……サイトさん！」

自分の身体が揺れている。

揺り籠が壊れ始めた。

徐々に徐々に意識は浮上し、あるいは地に足を付け始めた。

それでもなお、サイトは与えられる優しさを手放したくないと必死にそれにしがみついた。

やがて揺れは激しさを増し、ついには幕は上がってしまった。

「サイトさんっ！ おきなさい!!」

ぐいっとひつたくられた布団。

幕の向こうにはシエスタが立っていた。

ずっと自身を呼んでいたのはシエスタだった。

しかしすぐ近くに立っているにもかかわらずその表情は見えない。

夜のとばりはまだ完全に上がったわけではなかった。

サイトは言った。

「まだ暗いじゃないか……」

シーツを自分の身体に巻き巻き。

わずかに寒さが和らいだ気がする。

シエスタの呆れ声の上から聞こえた。

「サイトきーん。ご自分の立場わかってます？」

立場。

心の中で反芻し、サイトは薄目を開けてシエスタを見た。

やはり顔は見えない。

窓を見れば、夜空の境界はまだ遠く山の向こうだった。

「……使用人ってこんなに早いのか？」



「当然です。私たちは常に先回りして行動しますから。……ま、今日  
はいつもより少し早いですが」

んー、と唸る。そうかこんなにも早いのか。これは思っていたより大  
変だ。

どこか他人事のように思う。

それから、僅かに芋虫のように身体をくねらせた後、ついにサイト  
は観念して起き上がった。

その頭は寝癖で頭大爆発といった様相を呈していた。

シエスタは笑いを堪えて頬を痙攣させ、サイトの背中を押しして外へ  
と促した。

「さ、まずは顔を洗って身だしなみを整えませんか」

「んー。……洗面所は？」

「洗面所？」

あー……。

そう言えば、この世界に来て洗面所は見ることがない。

あの子の家でも水は汲んで使っていた。

風呂だけはなぜかあったが。

「さ、急がないと怒られちゃいますよ」

ぐいぐいと押されるがまま、サイトは部屋を出る。

部屋の外は極寒で、寝ぼけ眼を擦るまでもなく、一瞬でぱつちりと  
開眼した。

こりや、この世界の生活結構大変そうだと、やっぱりどこか他人事  
のようにサイトは思った。

## 第6話

シエスタに顔を洗いましょうと言って連れてこられたのは、冷え込みの厳しい外だった。

太陽の顔を出さないこの時間。

吹く風は極寒の冷気を持ってサイトの身を凍えさせる。

「ひーっ!!」と身体を抱きしめて情けない声で鳴いた。

そんなもの一切構わず、シエスタはぐいぐいと背中を押してくる。

見るに、彼女は丈の長いメイド服だが、寒くはないのだろうか。

「さ、着きましたよサイトさん」

着いたのは竜の口から水の出る、いわば噴水のような水汲み場だった。

ジョロロと流れる水は逐次その下の受け皿に溜まっていく。

サイトは数秒それを見つめて、鼻をすすってからシエスタを見た。

見られたシエスタは首を傾げた。

見つめて見られて、僅かな沈黙。

その間にまた鼻が垂れていた。

「あー」

突然シエスタが何かに気づいて声を上げる。

そして水汲み場の横に置いてあったバケツを拾ってきた。

「はい」

手渡されたそれをサイトは受け取る。

なるほど。これで汲めと。

幸い、水に氷は張っていない。

なら死なないだろう。

サイトは気合を入れてバケツで水を汲み取りにかかった。

拷問のような洗顔を終えて、サイトは部屋に戻ってきた。  
そこで渡されたのは燕尾服である。

早く早くとドアの向こうから急かされながら、サイトは着て見る。不恰好でぶかぶかだ。

サイズが合っていない。

燕の尾のような裾がふくらはぎぐらいまである。

これはさぞ格好悪いだろう。

確かめたいが、サイトの部屋に鏡は置いていなかった。

「シエスタ―」

呼ぶ声でドアはすぐに開いた。

シエスタは笑顔のままサイトを見て、直後硬直した。

「どうよこれ？」

スケートのようにくるつと回る。

シングルアクセル。

それから、特にこれを見ろと主張して尻を振ってみた。

びらんびらんと裾が揺れる。

「……………」

言葉にならない声を漏らすシエスタは、ぎこちない笑顔のまま口をパクパクと開閉する。

満を持して発した声は凄く元気だった。

「お似合いですわ、サイトさん！」

満面の笑み。無駄に大きい声。どことなく胡散臭い。

「本当？」

尋ねてみれば「もちろんです！」と変わらない調子だった。

「さ、急ぎませんと本当に遅刻してしまいます！」

またぐいぐいと背中を押される。

本当にこれでいいのか？

その疑問は誰がどう見ても至極真つ当なもので、それに応えるべきシエスタはサイトの背中で肩を震わせていた。

ひっきりなしに人は動き、あちこちから湯気が立っている。食器の触れ合う音や野菜を切る音。

時に怒声が聞こえる中でシエスタは声を張って呼びかけた。

「マルトーさん」

厨房の真ん中で怒声交じりに指示を飛ばしていた中年がシエスタを振り返った。

「おおー、シエスタ。そんでそっちが……」

マルトーの視線を受けてサイトは軽く会釈する。

吟味するようにマルトーはサイトを見た。

「悪いが自己紹介は後だ。シエスタ、教えてやんな」

「はい」

サイトさん、こっちです。

豪華な長テーブルの鎮座する広間は食堂らしい。

食器から燭台から何が何まで豪華絢爛。

貴族の暮らすこの学院で、貴族が一堂に会して食事をする場所だ。

当然のごとく意匠に凝っており、作られる料理も高価な食材をふん

だんに作った一流のものだ。

漂ってくるシチューの匂いを嗅いだけで、サイトは自分の腹の虫

が鳴くのを聞いた。

……そういえば、朝飯食ってねえなあ。

意識すれば余計に腹は減ってくる。

しかしつまみ食いする暇すらない。

シエスタに教えられるままテーブルクロスの敷き方だとか、食器の

並べ方だとかを教え込まれる。

とは言っても、まだ初日だから実際にサイトに与えられた仕事は食

事を運ぶだけだ。

食事がが出来上がるまでの間、見て覚えろとひたすらに仕事を叩き

こまれる。

シエスタの鮮やかな手さばきに感激してる間に、時間は随分経って  
いたらしい。

食堂から次々とパンやらシチューやらが運び込まれてきた。

「新入り！」

呼んだのはマルトーだ。

「お前も手伝え」

言われてシチューを二皿渡された。

出来立てアツアツのそれに、「アツチー!!」と悲鳴を上げて、辛うじて溢すことはしなかった。

大急ぎで手近な席に運んでいく。

その調子で無理やり渡されるシチューを運んでいたら、あつという間に全て運び終わってしまった。

その早さにはシエスタすら感心していた。早さの犠牲にサイトの手は真っ赤つかになった。

「ふーっ！ ふーっ！」

赤くなった掌に息を吹きかけてを冷ましていると、急ぎやってきたシエスタが裾を掴んだ。

「サイトさん、こっちへ」

連れていかれたのは厨房である。

中は湯気とか人の熱気でムンムンだったが、同じように良い匂いも充満していた。

これでもかと腹の虫を刺激してくる。

ぐーっと鳴った虫にシエスタは微笑んで

「賄いですけど」

とスープとパンを持ってきてくれた。

そのやさしさにサイトは泣きそうになった。

決して美味くはないが、しかしその黒パンとスープが今のサイトに何よりも暖かかった。

大喜びでそれを食している内にシエスタは食堂に戻った。

いつの間にか厨房の外は話し声で賑やかになっている。

学院に通う貴族の子らが集まり始めたのだ。

ドアの隙間からチラッと伺うと、小生意気そうな集団がいた。

どいつこいつもテレビで見た成金みたいな雰囲気だ。

なんていうんだろう。何か見下されているように思える。

俺はお前なんかと違うんだという自負が身体の節々に現れているようだった。

大体が被害妄想である。

貧乏人のひがみと言うやつだ。

なんだかムカムカしてきたサイトは席に戻って食事を平らげた。

食欲が満たされたおかげで直前の被害妄想はどこかへいつてしまった。

単純な男である。

サイトが食事を終え食休みしている席にずしずしと足音を響かせてマルトーがやってきた。

マルトーはぶすつとした顔でサイトの対面に座った。

腕を組んでサイトを睨むその顔は何やら思う所があるようだった。

「……えっと」

「……………」

何も言わないマルトーに、サイトは何を言えばいいのか思案する。こんな時どうすればいいか。

生憎と、サイトはアルバイトの経験がなかった。

平均的高校生であるサイトに、こういう時どうすればいいのか経験則はない。

だからサイトは自分の思う所を恐れずに言ってみた。

「サイト・ヒラガです。よろしくお願いします」

わずかに、マルトーの険が和らいだ。

でも何も言わない。

サイトは少し焦った。

「その……俺、常識のないところがあつて……迷惑かけてばかりだと思うけど……」

「……………」

「いろいろ教えてくれたら嬉しいです」

「……………」

やっぱりマルトーは何も言わない。

ダメかなこれ。

嫌われてるのかな。嫌われることなにかしたっけ？

あんまりに辛い沈黙にサイトが自分の至らないところを探し始めた時、重苦しくマルトーが口を開いた。

「一つ聞きたいんだが」

「なんででしょう」

「あんた貴族か？」

「違います」

「魔法は使えないのか」

「これっぽっちも使えません」

「生まれは何処だ」

「遠いところですよ」

「親御さんは元気か」

「元気だと思います」

「帰りたいとは思わないのか」

「帰りたくても帰れません」

「なんでお前さんここに来たんだ」

「ここに行けって言われたんです」

「貴族にか？」

「はい」

それっきり、マルトーは黙りこくった。

何を思っているのか、その眼は依然険しくサイトを見ている。

しかしなぜだろう。そこにはさつきまでと違う感情が渦巻いてる気がした。

これは……そう。

例えるなら捨てられた子犬を見ているような、そんな瞳だ。

そう思っていると、突然マルトーは席を立った。

あまりに唐突でかつ荒々しかったので、サイトはびくつと身をすくませた。

しかし、予想外にマルトーに掛けられた言葉は熱く優しいものだった。

「わかった！ よくわかった兄弟！ 安心しろ、分からないところは俺がきつちり教えてやる!!」

目から涙を流しながらマルトーはしきりにサイトの肩を叩いた。

「俺はコック長のマルトーだ。サイト、今日からここはお前の家だ！

何かあつたら言え。俺でもシエスタでも誰でも良い！ 出来る限り助けてやる！」

手の甲で眈を拭いながら、マルトーは熱く熱くサイトを抱いた。

何か勘違いされている気がする。

しかしすつかりマルトーの勢いに押し切ったサイトはか細く「ありがとうございます」と言うので精一杯だった。

「大変だったな！ 頑張ったんだな！」と続きマルトーの抱擁は留まるところを知らない。

「よくやった。もう無理しなくていい！」となり、最終的に「どれ、キスをしよう」となったところでようやくサイトは声を荒げた。

「やめろお!!」

「遠慮するな、お前に報いたいんだ!!」

「酔ってんのかおっさん!!」

しばし二人の取っ組み合いは続き、がったんがったんと机と椅子が揺れた。

ついに押し負けてマルトーの唇がサイトの頬に届こうかという時、これまた荒々しく厨房の扉が開いた。

「ひいいひいいひいいひ??」

「うっさいわね！ なんなのよ!!」

双方の動きが止まる。

サイトが見たのは、可愛い顔を怒りに染まらせたルイズ。

今にして気付いたことだが、その髪色はエリイのそれとまるつきり同じだった。

顔立ちももしかしたら似ているかもしれない。

場違いに思うサイト。迫りくるそれに対する現実逃避である。

翻って、ルイズが見たのは青白い壮絶な顔で中年に押し掛かられているサイトと、サイトに迫るキス顔の中年である。



後悔した。

開けたことを後悔した。

汚いものを見てしまった。こんなものを見るためにここに来たん  
じやない。

何しに来たんだ、わたし……。

## 第7話

ルイズはしばし我を失っていた。

目の前の光景が信じられず、茫然と虚空を見つめていた。

サイトもマルトーも突然現れたルイズを見つめてピクリとも動かない。

静かな時間が過ぎる。

「ルイズー？」

ドアの向こうから、ルイズを呼ぶ声をは聞こえてくる。

キュルケである。

ぎゃーぎゃーとうるさい騒音を注意しに行ったルイズが、なぜだか扉の前で固まってしまったので不思議に思ったのだ。

ルイズはその声に復活し、慌てて扉を閉めた。

それから大きく息を吸って、吐いて、もう一度サイトたちを見る。何も変わらない。

中年親父のキス顔は吐き気を催すほどの恐ろしさだった。

「……」

何を言えればいいのか、注意しに来たというのになぜ自分が圧倒されているのか。

ルイズはこめかみをもみほぐして言うべき言葉を考えた。

そうして出てきたのは、何とも当たり障りのない言葉だった。

「あんたたちうるさい」

声に覇気がない。

思いもがけない光景に、勢いは完全に削がれてしまった。

自分で言ってる違和感を覚えた。いつそ自分が間違っている気すらする。

「あんたは……」

マルトーが呟く。

もう随分長いこと学院でコック長をやっているマルトーは、ルイズがここに通う貴族であることにもちろん気づいていた。

制服を着ているし、そのピンク色の髪には見覚えがあった。

珍しいその髪色。高貴な貴族。何年前に、同じ髪色の生徒がいた。

彼のことを思い出し、マルトーは遠い眼をする。

その隙に、サイトはマルトーの下から脱出した。

息荒く、唇を守れたことに安堵する。

ただでさえただでさえなのに、セカンドまで奪われたくはない。

良かった……守れてよかった。

その余韻に浸ることもなく、ルイズに耳を引っ張られた。

「なんちゅうもん見せてくれてんのよ……!!」

冤罪です。

俺も被害者です。

いたいたい。

「はあ？」とルイズは不審そうにしながら、より強く耳を引っ張る。

いたいたい。

そうして、サイトが抵抗していたことをその口から聞かされて、ルイズはようやく耳を放し、マルトーに向き直った。

「あんた……このコックでしょう」

「ああ……？」

どことなく放心していたマルトーは、目の前の子供が貴族であることを思い出した。

誤魔化す様に咳払いをした後、改めて返事をした。

「そうですか？」

「こいつ、私の客なの。わかる？」

マルトーは自分の頬が引き攣るのを自覚した。

貴族って言うのはどいつもこいつもこんな感じだ。

貴族の強権を傘に着て、自分の思い通りになるよう物事を進めたがる。

こいつもそう言う輩だ。

貴族大っ嫌いなマルトーは、ついつい喧嘩腰になりそうな自分を律して何とか平静を装う。

「それで、優遇しろと？」

「誰もそんな事は言っていないわ」

ルイズは凜と述べる。

「普通に接しなさい。普通に仕事を教えて、普通に仕事を任せて、普通の給金を与えなさい。それで、あんたの、その……おかしな性癖に巻き込むのはやめなさい」

男同士の濃厚なキス。

場面を想像したルイズは頬を染める。

それを聞いたマルトーは、一瞬何を言われたのか分からず間をあけて、すぐさま反論した。

「いやいやいやいや、俺にそんな気はない！　なんだってそんな……」  
言いながら、マルトーは先ほどサイトにキスをしそうになったことを思い出す。

男同士、酒が入った時にはキスぐらい日常茶飯事なのだが、さつきは完全に素面で、サイトに憐れんだゆえ我を忘れての凶行だった。考えてみれば、出会って間もなく酒も飲んでないサイトにはさぞや身の毛のよだつ行動だったに違いない。

「あー……、悪ふざけが過ぎた。悪かったな新入り」

サイトはほっとした。

よかった。ホモじゃなかった。

もしホモだったらこれから先ずつと警戒して暮らさなきゃいけなかった。

「気にすんなよおっさん。俺も少しびびくりしただけだし」

懐深く、心優しいサイトはもうキスされそうになったことは気にしていない。

どうせファーストキスはとつくに奪われている。

今更セカンドだサードだと女々しく守るつもりはない。

もちろん男は別としてだ。

なにはともあれ一件落着。

サイトとマルトーは互いに和解し、握手までした。

笑い合う二人。

騒動を経て何だかんだ仲の深まった二人の間で、ルイズは半眼で二

人を睨んだ。

「……………」

怒気が膨れ上がるのを感じる。

サイトとマルトローは身をすくませ、恐る恐るルイズを見た。

「……まあいいわ」

ルイズはため息交じりに言った。

ほつと息を吐く。

そんなことより、とルイズはサイトの指さしてマルトローに告げた。

「昼、こいつ借りるから」

「へ?」

サイトは馬鹿っぽく声を出した。

「いや、俺仕事があるから」と逃れようとしたが、言い終わる前にマルトローがどうぞどうぞと快諾した。

「へ?」

「そ。じゃ、そういうことで」

ルイズは扉の向こうへ帰っていった。

貸出予定を組み込まれたサイトは、啞然とその後ろ姿を見送る。

ぼんつと肩に手を置かれて振り向くと、マルトローが親指を突き出して笑っていた。

声がなくともわかる。

幸運を祈ってるぜとかそんな感じだ。

守ってくれるんじゃないかなかったんすか、マルトローさん……。

昼。

午前の授業が終わり、広間でティータイムと洒落込む生徒たち。

各々、召喚したばかりの使い魔を連れ、友人やあるいは恋人と優雅なひと時を楽しんでいた。

サイトはそんな彼らを尻目に、ケーキや紅茶を運ぶ仕事をこなしていた。

黙々と注文された品をテーブルに運ぶ。

給仕くん。給仕くんとあっちこっちから呼ぶ声がする。これこれこの品を持ってきてくれと頼まれるのだ。

それに応じて、サイトは広間をあっちからこっちへ。こっちからあっちへ。忙しく駆け巡った。

「新人かね給仕くん」

「はあ……」

金髪でキザっぽい、なぜか薔薇を啜えている生徒にそんなことを言われた。

隣にはブロンドの女の子を連れている。それだけでサイトの敵愾心はメラメラ燃えた。

「僕が頼んだのはチーズケーキだよ。チョコケーキじゃないんだ」

「すみませんでした」

「いや、怒ってるわけじゃないよ。ただ、次からは気を付けてくれたまえ」

髪を掻き上げた気障野郎は、フォークでケーキを突き食べ始める。食うのかよ。

「気をつけないさいよ」と恋人っぽい女の子が便乗っぽく付け足した。サイトは一礼してその場をさがる。ベーと心の中で舌をだした。

あちらこちらを走りまわる。

その後も何度か注文ミスをして、何度か転びそうになったが、数をこなすうちにかなり慣れてきた。

「今度はちゃんと出来たね」

「はあ」

「これからも頑張ってくれたまえ」

何とかと言う銘柄の紅茶を気障野郎の所に持って行ったら薄っぺらい激励を貰った。なんで薔薇加えてんの？

聞きたかったが、貴族に向かっておいそれと声をかけるのは憚られる。

サイトは給仕に戻ろうとして、突然巨大な威圧感を感じた。覚えのあるそれにはっとする。

「さくい〜と〜」

—— 鬼がいた。

桃色ブロンドの小さな鬼である。

背中にオーラを纏ってゆらりゆらりと近づいてくる。

「昼は用があるって言ったじゃない……なんでこんな所で働いてんのよ……探すの手こずったじゃない……!!」

「あ……ぶ〜、ごめ……」

「なんか言いなさいよ、さくい〜と〜!」

「すみませんしたわすれてましたゆるしてくださいなんでもしますから」

「言ったわね?」

「え……?」

「なんでもって言ったわね?」

「あ、いや……」

「ならキリキリ話してもらおうわよお兄さまのこと、家に報告しなきゃいけないんだから」

首根っこを掴まれ引きずられる。

背はサイトの方が高い。力だってサイトの方があるだろう。なのに抵抗できない。すでに心が屈していた。鬼は恐ろしい。

取って食われようとされるサイトのことを、その場の貴族たちは見えて見ぬふりをした。

目の前のケーキや紅茶やワインに舌鼓を打つ。だが冷や汗をかいていた。触らぬ神に祟りなし。

その時ばかりは貴族庶民の区別なく、皆が心の中でサイトの安息をお祈りしていた。

## 第8話

ルイズに引きずられて、サイトが連れてこられたのは、ヴェストリの広場と言う中庭だ。

塔と塔の間にあるその場所は、西側にあるため日が差しにくく、人の気配も少ない。

ルイズは人目につきにくいと言うその理由で、この場所を尋問場所に選んだのだ。

「さあ、キリキリ吐いてもらおうかしら」

広場に到着して早々、ルイズ凜とした声音でそう言った。

右手に持った杖でビシツと左掌を打つ。小気味いい音が鳴る。

サイトは土の上だろうと構うことなく、その場に正座して粛々と頭を下げた。

「何でも聞いて下さい」

「いい心がけね」

ははあとより深く頭を下げるその様子は、まるで君主に平伏する家来のようなだった。

ルイズはにんまりと笑みを深めて単刀直入に聞く。

「お兄様はどこ？」

「ルイズ様の兄上様であらせられるエリイの野郎は、実家に帰ると言って、わたくしめと分かれましました」

「実家ですって？」

より強く掌を打つ音を、サイトは頭の上で聞いた。

「それは確かかしら？」

「間違いありません」

「そう」

自信一杯のサイトの言葉。

いくら聞き返そうともそれは揺るぎはしないだろう。だって虚勢だもん。

たとえエリイが嘘をついていたとしても、それはサイトには分からない。薄々感づいてはいるけども、あまり深く聞かれたくないから、



余計なことは言わないでおく。

今、サイトの心にはある少女との約束があった。それを守るために、サイトはこの場をやり過ぎさなくてはならない。

そして当然のことながら、エリイの嘘とかサイトの本心とか、そんなことはルイズには知る術がない。

実家に帰ったと言うサイトの言葉を、半分以上疑ってかかるのも、ある意味当然のことだった。だってあの野郎何年も帰って来ないんだもん。

今のところ、実家からエリイ帰還の一報はない。

配達途中だとも考えられるが、そもそもエリイはこの期に及んで、素直に実家に帰るタマだろうか。

考えるべくもない。答えは否だ。あいつにそんなタマはない。ルイズにもない。物理的にも。母親怖い。

サイトは嘘をついている。

ルイズはそう思った。

「ねえサイト？　ちよつと顔上げなさい？」

「は」

恐る恐る顔を上げるサイト。

ルイズはニコニコと怖い笑顔を浮かべながら、誰も居ない方向に杖を向ける。

「ラナ・デル・ウインデ」

短い呪文を口ずさみ魔力を込める。

「エア・ハンマー」

ドンツと衝撃が走る。

土の地面に落とされた呪文は土煙を巻き上げ、直径一メートル程度の範囲を円状に陥没させた。

一センチばかり凹んだ地面を見て、サイトは血の気の引く思いがした。

「さて、あれを見た今でも、自分の言葉に嘘偽りはないと誓えるかしら？」

超高速で首を振る。

必死の思いは額を伝わる汗に表れていた。

エリイが帰ってないことに感じているから、何となく片棒を担いでいる気がして、背中全面嫌な汗を掻いている。

「始祖プリミルに誓って真実だど？」

「始祖でも神様でも、なんにでも誓って真実です」

「そ」

これだけ脅してそう言うのなら、サイトは嘘は言っていないのかもしれない。

しかしエリイが実家に帰っていると言うのも考えづらい。

そもそもサイトは何も告げられずに学院に送られたのだったか……。

だとするならば、嘘を言っているのはエリイの方だ。

ルイズはそう結論した。

「いいわ。サイト・ヒラガ。あなたの言葉を信じましょう」

「ありがとうございます！」

再びサイトは平伏して感謝を告げる。

命が助かったことに安堵し、貴族の怖さを再認識した。

何あれ魔法!? 殺意高すぎ! あんなん死んじゃうじゃん!?

「面を上げなさい」

「は」

「次の質問よ」

え、まだあるの？

サイトは危機がまだ去っていないことを知る。

「エリイ兄様とはどこで会ったの？」

「あ、それは……」

初めて口ごもったサイトに、ルイズの眼がキラんと光る。

杖をサイトの眼前に突き立て、「隠し立てすると酷いわよ」と脅しを重ねた。

「も、森の中……」

「どこの？」

「わかんない……」

「……ラナ・デル——」

「本当にわかんないんです?! 俺気がついたらそこにいて!」

「はあ?」とルイズは呆れてしまう。

何言ってるんだこいつ。記憶喪失だとしてもいうつもりか?

もつとまじな嘘つけ殺すぞ。

「おれ、あの、確か……。えっと、ろ、ろば……。ろばあるかりでんちの生まれで」

「ふざけてるのかしら」

「あ、違った?! ごめん間違えた?!」

あたふたとロバロバなら思い出そうとしているサイトに、ルイズは「はあ」と溜息を吐く。

何を隠し立てするつもりかは知らないが、少し泳がせてやろうと思った。

「ロバ・アル・カリイエ」

「そう。それ!」

サイトはルイズのことを指さして「それぞれ」と主張する。

誰に向かって指差しとんのじゃわれ。

「そう。あなた西の生まれなの」

「うん!」

「……ロバ・アル・カリイエは東だけど?」

「ごめん間違った! 東だった!」

なんだか楽しくなってきた。

サイトが必死に言い訳を重ね、そのたびに墓穴を掘る様は滑稽で道化師顔負けだった。

ここまで面白く踊ってくれるのなら、家に一匹置いといてもいいかもしれない。

「つまり、あなたがお兄様と出会った森は、ここからずっと東のどこかと言うことね?」

「あ、それは違う」

「ああ?」

「そんなに遠くじゃないんだ! なんか宙に浮かんでた大陸の森で

!!

「……それ、アルビオンのこと?」

「そう、それだ!」

「またしても指を差してきやがったので、ルイズはその指をへし折りたくて仕方がなかった。」

「ぎゅっと我慢して問いたです。」

「お兄様はアルビオンに居たの?」

「うん」

「どうして? 内戦中よ」

「アルビオンと言う国は、今現在内戦の真ただ中である。」

「元々王政を担っていた王党派と、反乱分子である貴族派の二つに国は二分されている。」

「風の噂では、貴族派が優勢らしい。」

「わかんない」

「……」

「使えない駄犬だ。この様では道化師は無理か。再調教が必要だ。」

「ルイズは考えを整理して、今度は違う質問を試してみた。」

「森で会ったと言うけれど、お兄様は森で何をしてたのかしら?」

「わかんない」

「……あなたは森で何をしてたの?」

「わかんない」

「死ね」

「呪文の詠唱を始めたルイズに、サイトが「わー! 待って待って!」と懇願する。」

「本当にわかんないんだって! 俺気がついてたらそこにいたんだ!!」

「記憶喪失だと言っても言うつもり?」

「うん!」

「……」

「ルイズの冷たい眼差しに、サイトは「だって事実だもん!」と強硬姿勢を貫いた。」

「試しに詠唱してみれば、「本当なんです信じてください!」と土下座

した。

少しの間、じろつと睨みつけてもその姿勢は変わらなかった。何を隠しているのか。吐かせなければいけないが、あれこれ言って吐くような軟弱者ではなさそうだ。

どうでもいいことは少し突っつけばいくらでも吐くのに、大事なところだけは吐きそうにない。

忌々しい。エリイが背後に居なければ、尋問なり拷問なり好きに出来たのに。

ルイズは溜息を吐いて、「分かったわ」と告げた。

その一言で、恐る恐る頭を上げたサイトは、震える声で聞き返した。

「……本当?」

「ええ。分かった。元々お兄様はアルビオンに居て、今はどこにいるのか分からないってことね」

「エリイの野郎がアルビオンって所に居ただけは本当」

語るに落ちてるぞ駄犬。

ルイズは自分の髪を弄りながら、しばし考えにふける。

その様子をサイトはぼうつと眺めた。美少女が考え込む姿が絵になりすぎていて、見惚れてしまった。

「それにしても、どうしてエリイ兄様はあんたをここに来させたのよ」

「……わかんねえよ。俺だって騙されて来させられたんだ。……一緒に行くはずだったのに」

「どこにいくつもりだったの?」

「オレ、ヒラガサイト。コトバワカラナイ」

おいおい今更それはないだろ?

吐けよおい、吐いちまえよ。吐くつもりないなら、ボロを出すんじゃない。

つたくよおとルイズはサイトをまじまじ見る。

サイトは突然ルイズが見つめてきたものだから、顔を赤くした。女の子に見つめられた経験はあまりない。母ちゃんぐらいだ。

「な、なんだよ」

「あなた貴族じゃないでしょう?」

「そうだけど……」

「お兄様は貴族なのよ。出来損ないだけど」

出来損ない？ とサイトが聞き返したが、ルイズは取り合わなかった。

「どうして、公爵家の長男たるお兄様が、あんたみたいな平民と仲良くしてるのか、不思議でしょうがないいわ」

「なんだよ……。貴族がそんなに偉いのかよ」

見下されたことに気づいたサイトの声には、隠しようのない怒気が籠っていた。

それを受けたルイズは片方の眉を吊り上げる。

「当然でしょ。平民が不自由なく生きていけるのは、私たちメイジがいるからなのよ？ 魔法一つ使えない平民風情が、対等に付き合えるわけないでしょ」

「そんなん貴族だって同じだろうが。俺たちみたいな平民が大勢いるから、食っていけないだろ」

しばし二人はにらみ合う。

この世間知らずの平民に、どのように言っただけ聞かせようかとルイズは考えた。

杖を向け、出来る限り低い声を出そうと頑張って口を開く。

「口に気を付けなさい。サイト・ヒラガ。私は公爵家の三女。王家に連なるヴァリエール家の人間よ。エリイ兄様のよしみで、多少の無礼は見逃してあげるけど、それ以上の暴言は許さないわ」

「……」

サイトは向けられた杖とルイズの顔を交互に見る。

ルイズの顔立ちとその髪色が、見れば見るほどエリイにそっくりで、サイトはエリイのことを思い出していた。

あれは、召喚されて数日後の出来事だった――。

『サイトくん。申し訳ないが、これから少しの間眠ってもらおう』

『え、なんですよ？』

『テイファが風呂に入るらしい』

『――覗かなきゃ』

『頭湧いてんのかてめえ』

『でもでも、あんなメロン……ドデカメロンを前にじつとしてられる訳がねえ!』

『まったく、サイトくんは分かかってねえな。……覗いていいのは俺だけだって言ってるんだよ。湯上りティファを拝むことすら許さねえ』

『ふざけんな。独り占めするつもりか。なら俺にも考えが——』

……そうして、サイトは気絶したのだった。

あ、思い出したらむかむかしてきたわ。

目を覚ました時のドヤ顔が未だに脳みそにこびり付いている。

あいつは絶対罰当たる。その内俺が浴びせてやる。男の恨みって言う神罰を。この世のすべての男に代わって。

「お前の兄貴ほんと最悪だった」

「いきなり何よ。それは知ってるけども」

「貴族とか平民とかくだらねえ。そんなもんにごだわったって、元は同じ人間じゃねえか。もつとましな生き方出来ねえのかよ」

ルイズは顔をしかめてサイトを見る。

折檻しようか迷っている様子だった。

サイトが喉を鳴らす目の前で、杖に視線を落とした。来るなら来いと覚悟を決めたが、結局魔法が飛んでくることはなかった。

「あなたには、分からないわよ。分かるうともしないでしょうけど」杖をマントの下にしまって、ルイズは背を向ける。

「仕事に戻りなさい」と背中越しに言い捨てて、その場を去っていく。サイトはルイズの背中を見送って、その姿が見えなくなっただけと息を吐いた。

「貴族って、なんなんだよ……」

心の底から、そう呟いた。